

# 06年イカ類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	漁獲		産地				輸入			輸出	
	スルメイカ	アカイカ	スルメイカ生	スルメイカ冷近	スルメイカ冷遠	アカイカ生	アカイカ冷	マツイカ	コウイカ		調製品
17	222.0	47.0	69.6	47.5	5.5	0.7	38.9	64.3	32.0	44.1	14.6
18	157.0	62.0	41.2	53.0	6.3	0.0	49.2	65.9	28.1	47.4	10.7
%	71	132	59	112	116	2	127	103	88	107	74

年	消費地		在庫量			消費支出		加工品			
	スルメイカ生	アカイカ冷	スルメイカ生	スルメイカ冷	その他	生イカ	イカ製品	イカ塩辛	干スルメイカ	燻製	
17	42.7	10.3	2.5	6.7	41.9	10.6	3,103	56.5	25.94	12.7	11.8
18	40.1	10.3	2.3	7.0	41.0	9.3	3,045				
%	94	100	90	104	98	88	98	0	0	0	0

年	産地		輸入		輸出	消費地		消費支出					
	スルメイカ生	スルメイカ冷近	スルメイカ冷遠	アカイカ生		スルメイカ生	スルメイカ冷						
17	213	258	218	152	115	417	616	172	416	355	625	796	3,068
18	240	252	201	125	130	441	702	172	412	365	678	827	2,972
%	113	98	92	82	113	106	114	100	99	103	108	104	97

## スルメイカの資源

平成年代に入って日本近海のスルメイカの漁獲は、平成10年を除くとかなり安定的に推移しており、20～40万トン台の高い数字を記録しており、本年はそれを下回る水準で近年では最も低かった。

太平洋側の漁獲の殆どを占める冬生まれ群の資源量は、1980年代の終わりから増加傾向を示し、1996年には134万トンに達したが、経年変動が大きい。2006年の資源量は2005年を24万トン下回る58万トンと推定され、1999年をやや下回る水準であった。SSBIは1980年代後半から増加傾向を示し、1993年には最大の47万トンに達した。しかし、1996～2000年は経年差が大きかった。2006年級を産んだSSBIは前年度とほぼ同じ水準の33万トンであった。現在の冬季発生系群の資源水準は中位と判断され、資源動向は最近5年間の傾向から減少傾向とみられている。

主に日本海（対馬暖流系）で漁獲の対象になる秋生まれ群の資源水準は、1980年代前半は減少傾向にあり、1980年代は主に約50万トン（平均56.3万トン）、1986年には21万トンとなった。1980年代後半以降は増加傾向となり、2000年前後には約150万～200万トンとなった。近年は減少傾向となり、2006年の資源量は122万トンと推定された。漁獲割合は1980年代に資源量の減少と共に上昇し、1980年代半ばには約40%となった。しかし、その後は資源量の増加と共に減少し、1990年代は30%以下、近年は約20%であった。なお、スルメイカの資源量は中長期的な海洋環境の変化によって変動すると考えられ、1990年代以降の資源の増大は、海洋環境がスルメイカにとって好適な状態に変化したためと判断されている。

## 産地水揚量と価格

18年の日本近海のスルメイカ水揚量（継続漁港）4.1万トン（前年7万トン）、冷5.3万トン（前年4.8万トン）と生鮮はかなり減少、冷凍は増加した。

TACに基づく漁業種類別漁獲量はトロール2.3万トン（前年3.9万トン）、まき網0.5万トン（前年1.5万トン）、釣りの生鮮が5万トン（前年6.1万トン）、釣りの冷凍4.8万トン（前年4.5万トン）であったが、トロールとまき網が目立って不振で、釣りは生鮮（小型船）が低調、凍結船がやや好調な漁獲量となった。

冷凍は、本年も昨年同様北陸船団が日本海スルメイカ主体の操業をし、青森、北海道、岩手船団がアカイカ（ムラサキイカ）と日本海に分かれての操業であったが、赤イカは前年度漁期の最終航海が好調だったことに加え、初夏の初航海もやや好調な漁模様であった。

生スルメイカの海域別漁獲量は、日本海10,577トン（前年11,635トン）、太平洋28,457トン（前年58,837トン）、オホーツク0トン（前年0トン）で、太平洋で大きく減少したのを始め、各海域とも水揚げを減らしている。また九州北部での漁獲も2,217トンで前年（3,749トン）を下回った。

本年も中型船凍船は、当初スルメイカとアカイカ操業とに分かれたが、今年も概ね日本海操業が主体で日本海でのスルメイカ漁は前年を上回り順調であった。

また本年も業界では、従来からスルメイカー極集中の排除、三極漁場の選択的移動、漁獲努力量の分散、急速凍結によるブロック製品の品質向上等付加価値の高い魚種や製品作りの奨励、サイズ選択、IQFの促進、アカイカの高度利用等の指導は本年も続いた。

産地価格は、生鮮240円で前年（213円）、冷凍は252円で前年（258円）となり生鮮が水揚げ不振で堅調、冷凍も比較的堅調の推移であった。

本年の特徴は、本年は冷凍スルメイカの水揚げ減少傾向が止まり、むしろやや上向いた、本年の冷凍スルメイカのサイズ組成は、21～25尾サイズが16%で前年（20%）をやや下回り、26～30サイズも15%で前年（23%）を下回り、サイズ組成も20尾以下は6%で前年（12%）より少なく、全体的にやや小型化し、バラツキが目立った、AR、FOR、ペルー水域等、海外でのイカ類はペルーアカイカが前年をやや下回り、マツイカは引続き低調ながらも昨年を上回った、こと等である。

## 在庫量

18年は昨年よりやや多い5.6万トンの在庫から始まり、例年通り6,7月に最低になったが、その数量は昨年よりやや多い3万トンであった。その後、新漁の水揚げが始まったが、まきあみやトロールも漁の伸びもなく、在庫もやや膨らんだものの伸びは少なく、この結果、越年在庫は5万トンと前年を下回った。平均在庫量も、4.1万トンで、ほぼ前年（4.2万トン）並みであったが、水準としては依然低くスルメイカ資源の低迷期であった昭和50年代の水準まで下がっている。

## 消費地入荷量と価格

スルメイカの消費地入荷量は、生4万トン（前年4.3万トン）、冷凍1万トン（前年1万トン）であった。本年も昨年以上に生イカの生産が低調であったことで生鮮の入荷が引続き前年を下回った。価格は、生412円（前年416円）、冷365円（前年355円）で生・冷ともほぼ横ばい推移であった。

消費支出でみると購入数量、購入金額とも前年をやや下回った。

## NZイカ

18年のNZイカ釣漁は、本年は4隻、1.9千トンでやや減少した。因みに前年度は4隻、2.5千トンであった。

産地水揚量（全漁連）は、2,340トンで前年（3,068トン）を下回った。

価格は194円で前年（220円）下回った。

## SWAイカ

18年のSWAマツイカ釣漁は、AR5隻 - 9.3千トン（前年5隻 - 5.6千トン）、FOR0隻 - 0トン（前年4隻 - 0.1千トン）、SA公海0隻 0トン（前年1隻 0.3千トン）であった。

何れの海域も極端に低調な事もあり、この海域での大型船の操業は更に減少している。

産地水揚量（全漁連）は、3,217トンで前年（1,800トン）をかなり上回った。

価格は217円で前年（222円）をやや下回ったが、供給量の極端な少なさもあり加工原料マーケットも縮小している。

マツイカのサイズアソート(R物)は、21-25が17%、16-20が16%、26-30が8%で、前年(21-25が23%、26-30が21%、31-35が14%)に比べると16-20サイズが多くなった。

## アカイカ

本年も昨年とは違って初航海にやや好調であったが、その後秋から冬にかけては昨年同様低調な漁模様であった。その他の季節も近海、沖合（東経170度以東水域）悪かったものの昨年をやや上回って推移した。したがって近海操業は悪かった平成11(1999)年に次ぐ漁となった。また、小型船の漁獲は極端に少なく21トンの水揚げにとどまった。なお、大型船（沖合操業）は4隻0.3千トンで、前年（5隻0.2千トン）並みであった。

全漁連集計によると、生21トン（前年732トン）、冷1.5トン（前年0.8万トン）であった。

産地価格は、生68円（前年158円）、冷203円(前年220円)であった。

アカイカは近年中国を主体とした諸外国からの製品輸入も年々多くなっている上に、水揚げの減少・低迷が続いていることにより、マーケットシェアも落ちていることから、国内アカイカ市況は周年を通じて本年も軟調相場が続いた。

海外アカイカ、ペルーのみ(200海里内外)の操業であったが、夫々6隻-36.6千トン、1隻-0.9千トンで、昨年実績（12隻-42.2千トン、4隻-1.1千トン）を下回った。

本年のペルーアカイカの耳とりのサイズアソートは5尾以下94%（昨年は5尾以下が91%）と昨年以上に超特大サイズに偏り大型が多かった。

産地水揚量（全漁連）は、34,207トンでほぼ前年（31,252トン）並みであった。

価格は98円でほぼ前年（89円）並みで推移した。

## 輸入イカ

18年の輸入イカ（コウイカを除く）は、中国主体に万トン6.6と前年（6.4万トン）を引続きやや上回った。

価格は、このところ上昇が顕著で441円と前年（417円）をやや上回った。

冷凍イカの主要輸入国は、中国28,877トン（前年28,948トン）、タイ7,635トン（前年9,16

6トン)、ベトナム7,064トン(前年5,963トン)、米国4,626トン(前年7,732トン)、フィリピン967トン(前年1,323トン)、インド1,940トン(前年1,788トン)、NZ1,436トン(前年1,233トン)、ペルー4,842トン(前年3,332トン)、アルゼンチン5,648トンで(前年1,992トン)相変わらず中国、タイのシェアが高かった。

18年の輸出は、1.1万トンで国内漁の引続く低調さもあり、前年(1.5万トン)を更に下回った。

### モンゴイカ

18年のコウイカの輸入は、2.8万トンで前年(3.2万トン)を下回った。

輸入価格は、702円で前年(616円)を続騰している。

消費地入荷量は、0.7万トンで再度前年(0.7万トン)並みであった。

価格は、827円で前年(796円)を輸入価格の上昇もあってやや上回った。